

「思いをつなぐ使命」

(8月7日付の神戸新聞・朝刊から)



神戸山手女子高3年

くわの
桑野 あおい
葵さん

「広島への原爆投下から、今日でちょうど76年になります……」。朝のニュースを見て初めて、私は今日が8月6日であることに気付いた。しかし、次の日に新聞を読んで、平和に慣れきった自分自身を恥じた。

「私たちには使命があります」広島市の平和式典に子ども代表として参加した小学生が読み上げた「平和への誓い」は、こう始まる。あの日起こった悲惨な出来事や被害者の思いを知り、考え、平和の尊厳や大切さを世界中の人々や次の世代に伝える、使命。貴方はその使命を、果たせますか、と胸に突きつけられたようだった。そして、その問いに「はい」とは即答できなかった。

私には8月6日を忘れる理由がたぐさんあった。受験生だから勉強しないといけないとか、部活をもうすべし退するから頑張らないといけないとか、家事を手伝わないといけないとか。時間に追われているように毎日忙しかった。

原爆や戦争のことは、学校の平和学習やテレビで聞き飽きてもいい。私は自分が8月6日を忘れていたことに、少しの危機感も罪悪感も覚えていなかったのである。

「本当の別れは会えなくなる」とではなく、忘れてしまふこと。私の心を見逃かすような言葉を読んで、思わず自分の行いを振り返った。そして、今年の原爆の日に黙祷しなかったことを思い出し、慌てて鉛筆を置いて、目を閉じた。これまで「想像もできないようなこと」だった原爆とその被害。しかし、私はそれらを知り、未来へ受け継がなければならないのだと思うと、初めて「想像できないこと」がはつきりと胸の裏に浮かんできた。

「忘れていた」と、許して下さい。空が光るって、肌が焼けるって、どんな風でしょう。つい昨日まで一緒にいた人が、今日はいないとき、自分の命が消えるのを感じるよ、とつぶやいたらいいんですか」「被害者」にははななく、あの日

かに生きていた誰かの御霊に、そろ語りかけた。目を開けたとき、いつもの世界は全く違って見えた。

今まで私は、原爆の残酷性や被害の規模、投下に至る経緯等は学んできたが、そこにいた人、一人一人の悲しみにまで思いが至っていなかったのではないだろうか。広島・長崎の後にも、世界中で戦争があった。私はその度、死者数や戦費といった数字を見てその戦争を知ったつもりになっていた。しかし、これまでの全ての戦争の後ろには、人がいた。そして悲しみがあつた。何万人規模の被害が出るから、何かが焼けるから、戦争をしてはいけないのではない。無数の悲しみを生むから、戦争は絶対にしてはならないのである。過去の戦争を忘れないことは、その悲しみを忘れないことだ。「僕ら若人の力によって、きつと平和な社会を築き上げてみせる」広島市の決意を、私も持ち続けること誓った。